京都大学

生態学研究センター・ニュース No. 20

— 目 次 —

京都大学生態学研究センター運営委員会 (第八回) 議事要旨	1	David Sloan Wilson 博士の来日を終えて 京都大学生態学研究センター	7 9
京都大学生態学研究センター協議員会 (第十三回) 議事要旨	2	創立3周年記念講演会のお知らせ 京都大学生態学研究センター研究会のお知らせ	9 9
京都大学生態学研究センター「業績目録」 についてのアンケートのお願い	2	読者のページ information	10 11
協力研究員 (Guest Scientist) に関する お知らせとお願い	3	編集後記 今後のスケジュール	11 12
1993年度センター研究会報告	4		

京都大学生態学研究センター運営委員会 (第八回) 議事要旨

日 時：1993年12月15日 (水)

場 所：京大会館

出席者：運営委員20名、幹事1名

議 題：

1. 教官人事について

A. 温帯生態研究部門教授の人事

表記教授人事は欠員がないため内部昇任人事となるので、人事基準委員会を設置せず人事選考委員会を発足させることが提案され、承認された。人事選考委員として議長より5名が推薦され、承認された。

B. 水域生態研究部門の後任教授人事について

当部門の手塚泰彦教授が1995年3月に定年退官されるので、後任人事を行うために人事基準委員会を設置することが提案、承認され、5名の委員がセンター長から委嘱された。

2. 概算要求について

前回運営委員会が不成立であったため、平成6年度概算要求の説明がなされた。建物新営と生物多様性に関連する部門増を重点事項として出したことが報告され、了承された。センター移転計画の経過報告がされた。

3. その他

- (1) 生態学研究センター主催の国際シンポジウム「生物多様性の生態学的展望」(1993年12月1日～12月5日)が無事に終了した。
- (2) 共同利用専門委員会の活動報告 本年度共同利用事業採択リストが配付され、研究会テーマ、期間、場所、使用施設等の問題点について討議した。

(文責：安部琢哉)

京大大学生態学研究センター協議員会(第十三回)議事要旨

日 時：1993年12月15日(水)

場 所：京大会館

出席者：協議員6名、幹事1名

議 題：

1. 教官人事について

A. 温帯生態研究部門教授人事

内部昇任人事であるので人事基準委員会は設置せず、人事選考委員会の設置をすること、5名の委員が推薦されたことが報告され、承認された。

B. 水域生態研究部門教授の後任人事

1995年3月に手塚泰彦教授が定年退官されるので、後任人事基準委員会を設置すること、5名の委員が委嘱されたことが報告され、承認された。

2. 平成6年度概算要求について

平成6年度概算要求事項の補足説明と本センターの移転計画の経過が報告された。

3. その他

(1) 生態学研究センター共同利用専門委員会の本年度活動の経過が報告された。

(2) 竹市悟己氏の研修員の受け入れ(1994年1月1日～3月31日)が承認された。

(文責：安部琢哉)

京大大学生態学研究センター「業績目録」についてのアンケートのお願い

今まで、生態学研究センターでは毎年、構成員(常勤スタッフ、大学院生および研修員)および協力研究員が、各年に発表した業績(印刷物)のリストを、センター・ニュースのなかで刊行しております。業績目録第1・2巻(1991・1992年)に引き続き、今回も、第3巻として、1993年のリストを4月に刊行の予定です。スタッフや院生については、各人ごとに前巻をに引きつづいて発表年代順のナンバーをふり、新たに加わったメンバーの場合にはそれまでの全リストを掲載するなど、発表活動が検索しやすいように考えており、また、発表年以外には、業績の種別(原著論文、総説、解説記事、報告書など)についてはまったく区別しておりません。また、印刷物のリストとは別に、おなじ時期に刊行するセンター・ニュースに年次活動報告をまとめてきました。

このような、業績目録というより印刷物リストといったものを毎年刊行することについては、各巻の「はじめに」にあるようにそれなりの思い入れと議論に基づいていますが、一方で、その意義についてさまざまなご意見・ご批判もいただいております。3年を一区切りとして、今後の活動報告のありかたを検討するために、添付のアンケートでみなさんのご意見をうかがえればとかがえました。ご協力いただければ幸いです。

協力研究員（Guest Scientist）に関するお知らせとお願い

京都大学生態学研究センターでは、全国共同利用の一環として学内外の研究者に協力研究員の委嘱を行い、その活動を推進して参りました。1992年4月に発令の方々の任期は1994年3月末で、満了となりますので、多数の方々に協力研究員の継続申込をお願い申し上げます。また、新たな御参加も強く希望しております。なお、協力研究員となられた方々にはセンター長より正式の辞令を出すことになります。

協力研究員の方々には、（１）センターの各種共同利用事業への積極的な参加協力、センターの貢献度が高いと判断される報告書、学术论文の中にセンターの役割を付記することをお願いしたいと希望しております。今回の任期は1994年4月から1996年3月までとなります。参考としてこれに関連する当センターの申し合わせを掲載します。なお、今回継続必要な方々はセンターニュースNo. 15（1993年4月発行）の20ページに掲載しております。

1．京都大学生態学研究センター全国共同利用に関する申し合わせ

- （１）全国共同利用のセンターとして、生態学及びその関連分野に関し、次の項目について共同利用を実施する。
 - a．共同利用
生態学の特別研究プロジェクト及び共同研究、個別共同研究。
 - b．共同利用実験施設等共同利用
野外研究施設・大型機器などを利用する実験、研究。
 - c．施設利用（ヴィジター・システム）
 - d．その他
- （２）上記の目的を達成のため必要に応じ招聘外国人学者を受け入れ、また協力研究員（Guest Scientist）・その他を委嘱することができる。

2．京都大学生態学研究センター協力研究員（Guest Scientist）の委嘱についての申し合わせ

- （１）生態学研究センター（以下「センター」という）の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員（Guest Scientist）を委嘱することができる。
- （２）協力研究員は、協議委員会の議に基づきセンター長が要請し、本人の承認を得て、センター長が委嘱する。
- （３）協力研究員の任期は原則として2年とする。

土壌研究会 - 土壌の包括的評価
(青枯病発生土壌の特性)

平井英明
宇都宮大学農学部

これまでの土壌における研究は土壌の無機成分なら無機成分、有機成分なら有機成分、微生物なら微生物だけというように土壌を細分することによって研究が進められてきた。このことにより各分野の研究は飛躍的に進歩し、知識も深まったが、いまだに土壌を総体としてそれらの知識を総合して理解することができたとはいえない。これは、専門分野の細分化が進めば進むほど各専門分野間の溝が深まり同じ土壌を研究し、理解する上で必要とされる専門分野間の交流が少ないことと、土壌を総体として理解する手法がいまだに開発されていないことによる。この前者の弊害を解消するために土に関心をもつ若手研究者が集まり、1990年11月に第一回の研究会が催された。第4回の研究会の際にこの研究会の名称を土壌研究会 (A meeting for the study of holistic soil science) とし、1994年1月までに7回の研究会がもたれた。

京都大学生態学研究センターより助成を受けた本年度はトマト青枯病発生土壌の特性を吟味することを目的としてフィールド調査を7月に行い、土壌試料を採取した。さらに、その分析結果に基づく青枯病発生土壌の特性に関するデータ検討会が1994年1月に行われた。参加した研究者は、土壌微生物、土壌生成、土壌有機物、植物栄養、土壌肥沃度を専門としていた。

土壌の分析項目は一般化学性、0.1N塩酸可溶金属元素、全炭素、全窒素、無機態窒素、一般微生物数、植物体養分分析であった。また、青枯菌の土壌への接種実験も行われた。さらに過去の研究成果も考慮して青枯病発病土壌および、非発病土壌の特性が検討された。その結果、青枯病非発病土壌の特徴は排水良好 (火山灰土壌) で、放線菌、糸状菌数、0.1N塩酸可溶のCa、全炭素、全窒素含量、およびCEC (Cation Exchange Capacity) の高いことであった。一方、青枯病発生土壌の特徴は表土が薄く、粘質であり、水田土壌を畑地に転換して十分排水が行われていないことと、アンモニア態窒素の多いことであった。これらのことから青枯病を回避するために土壌が備えるべき基本条件は、カルシウム、有機物含量が多く、水はけが良く、酸化状態におかれていることであると結論づけられた。しかしながら、上記の基本条件を満たしていても青枯病が発生している農家も認められたので、さらに検討を加えた。

青枯菌の土壌への接種実験で、その生残率と発病割合に関連性が認められたので、この生残率が発病予測に有効ではないかと考えられた。調査した農家のうち、全く発病が認められず、かつ生残率の著しく低い農家はただ一軒だけであった。その農家の土壌の特徴はとても柔らかく、団粒構造の発達した土壌であることであった。その農家の土作りの方法の特徴はハウス内で未熟堆肥を発酵させたのちに土に鍬込むという方法を採用していた。青枯菌の生残率がなぜこの土壌で著しく低くなったのかについては今回行われた分析結果からは明らかにできなかったが、今後の検討課題として糸口となる結果が得られた。

海洋底生生物群集の生態学 - 個体の行動から群集へ

大垣俊一

海洋底生生物の生態学は、これまで主として個体群、群集レベルで行われ、その一段階下の個体レベルの研究は皆無と言えないまでも決して多いとは言えなかった。群集を考える際も個体群の平均的ないし全体的な性質をもとに論じられ、帯状分布構造(zonation)の研究などはその典型と言える。しかし近年、多くの陸上動物や、海では主に魚類を対象に展開されつつある行動生態学は、ようやくこの分野にも影響を与え、個体の行動の観察事例が徐々にではあるが増えつつあるように見える。今回の研究会(1994年1月22~23日、京大会館)では、甲殻類、巻貝などについて実際に個体レベルの行動研究を行う研究者、行動生態学の理論を海洋底生生物に適用して研究を進める者、個体の行動に関心を待ちつつ群集研究を行っている者などが集まり、おのおのの立場から発表を行う中で、個体レベルの研究と群集との関わりについて検討した。

まず個々の発表では、一般的な行動生態学の理論は、海洋底生生物についても有効に活用できること、また、野外での連続観察やビデオを利用した室内での個体の行動観察により今まで知られていなかった興味深い事実が多く見出されることなどが示された。全体討論では、これまでのように群集¹個体群、個体群²個体、というような隣接階層どうしの関係以外に、hierarchyを飛び越えた個体³群集の関わりが重要であるという指摘がなされ、一例として個々の個体の"character"が群集構造に影響を与えているとみられる例などが示された。群集を個体群レベルどころか個体レベルまで下ろして分析しようとするこのようなアプローチは、実際にフィールドに立つ我々の視点にも近く、ある意味で自然である。そこで実際に我々が目にするものは個々の個体であって「種」ではない。しかし一方このようなアプローチは、時間、空間的に特定の局面に議論が限定されやすく、どこまでも個別的な話に止まるのではないかという危惧が付きまとう。それでもあえて一般化するの、しないのか。どのような一般化がありうるのか、今後の課題と思われる。

もう一つ、海洋底生生物の個体研究には実際的な問題もある。潮間帯で水につかり、強い波に打たれて個体の行動を追いつけるのはかなりの重労働であり、時に危険を伴う。そのせいかどうか、欧米ではcage experimentなど干潮時の作業に相当のエネルギーを費やす研究者はあっても満干を通じた詳細な行動観察を行う例はほとんどない。一方日本ではこの種の研究はそれほど珍しくなく、あるいは「日本人向き」の分野なのかもしれない。野外での地道な行動観察にビデオなどの機材や行動生態学の理論をうまく組み合わせることで、今後この分野の研究が進展していくことが期待され、またその可能性が示された点、今回の研究会は有意義なものだったと言えよう。

インドネシアにおける植物生態学研究の現状と今後の課題

鈴木英治

鹿児島大学教養部

平成6年1月28～29日に京都大学の楽友会館で、上記の研究会を行った。第一日目には最近の具体的な研究例として、西カリマンタンで鈴木を代表者とする3年間の国際学術研究の調査結果を報告してもらった。2日目には、東西のカリマンタンとスマトラで研究している3名がそれぞれの研究体制について報告した。

初日の最初には、鈴木が「西カリマンタンの植生と人間の影響」として、3年間の調査の概要と当地域の植生について、特に人間との関わりを中心に報告した。この地域では古くから人々が生活しているので、フタバガキ科の一部分のテンカワンと呼ばれる種類では実から油を取るために植林されたり、焼畑、商業伐採によって破壊されたり、森林は人間のさまざまな影響を受けていた。ついでインドネシアから来たラハマンさんがフタバガキ林、ケランガス林、焼畑跡地の土壌調査結果をのべた。生態学研究センターの甲山隆司さんは「熱帯林アーキテクチャーの構成要素と動態」として、パダン、屋久島のデータとも比較しながら、熱帯林内の樹木の動態について議論した。島根大学の小池文人さんは「熱帯林における生物的活動の空間分布」として、土壌から林冠層におよぶ範囲の生物活動について西カリマンタンで調査したことを報告した。東京大学の梶幹男さんは、「西カリマンタンの熱帯多雨林における *Dryobalanops beccarii* の種子落下量と実生の定着」を報告した。本種はフタバガキ科高木であり、調査区の胸高断面積合計の25%を占める優占種で、5枚の羽根を持った果実をつくる。1haの調査区で74個/m²の密度で果実が落下したが、その42%が健全な果実であり、落下後すぐに発芽して1ヵ月後には1.8本/m²の密度で実生が発生した。しかしその約半分は根が土壌に入れずに、間もなく死亡すると推定された。生態学研究センターの院生の野間直彦さんは、「オオバギ属 *Macaranga* の多様性と生態」として、調査地域に出現する約15種の *Macaranga* 属が、先駆性のものから極相林の低木に適応したものまでさまざまに分化していることを報告した。鹿児島大学の院生の山田俊弘さんは、「熱帯多雨林におけるアオギリ科の *Scaphium macropodum* の生活史」として、この種の成長にともなう樹形・葉形の独特な変化、大きな羽根を持った果実の散布と定着過程を報告した。

懇親会で大いに語り合った翌日は、鈴木が「西カリマンタンでの研究状況と今後の課題」を述べ、研究を今後発展させていく上での体制上の問題点を中心に議論した。また西カリマンタン、東カリマンタン、スマトラのパダンで採集した樹木標本の2地点間の共通種は数パーセントしかなく、赤道直下にならんだ地域では植物相の多様性が高いので、熱帯多雨林の植生全体の理解にはまだまだ多くの調査が必要であることを示唆した。大阪教育大学の米田健さんは、来年度からJICAのプロジェクトとして始まる「西スマトラ州でのFBRT研究計画の現状と課題」を紹介した。3年間の計画でパダンのアンダラス大学と協力して森林の生産力、動態、人間の活動の森林への影響の評価などが行われる。信州大学教育学部の渡辺隆一さんは、「東カリマンタンの研究の現状」として、京大の東滋先さんを代表とする科研の調査やJICAのサマリダでの研究、他の外国の研究チームの活動を報告した。科研の調査は1983年の山火事跡の遷移を追跡しているが、永久調査区を設定してあるので今後も測定を続けるという。

米田さんは研究会の2日後、渡辺さんも2週間後には再び現地調査に赴くという慌ただしい中で開かれた研究会であったが、それだけに現実の問題としてインドネシアにおける調査を今後どのようにしたらよいかを話し合うよい機会であった。ただ、それぞれの内容が盛り沢山だったのでその紹介に時間がとられ、議論する時間が不足ぎみであったのが残念であった。

David Sloan Wilson 博士の来日を終えて

今年1月3日から23日まで、David Sloan Wilson 博士が日本学術振興会の招聘研究者として来日され、当センターを拠点に日本の研究者と交流されました。Wilson 博士は、生態学および進化生物学の理論研究、とくにgroup selection あるいはstructured deme の理論で名高い方ですが、最近では生物群集の理論（とくに多種共存機構）や進化ゲームの理論を中心に活発に研究されています。また、人間社会の進化生態学的研究も最近手掛け、犯罪データなどを駆使して仮説とその検証に意欲を燃やしておられます。逆に、魚など、他の生物の行動研究に心理学など人間研究からの視点を応用してみたり、彼の話の聞いていると、大変よい知的刺激になりました。日本社会・文化についても事前にいろいろと調べ、滞在中にも日本の小説（夏目漱石、志賀直哉、川端康成、安部公房など）を猛烈な速度で読み飛ばしていました（ただし、英訳で）。われわれにとっては非常に有意義な招聘でしたが、先方はどうだったのか、といささか心配だったところ以下のような感想が日本学術振興会への報告として寄せられました。ご本人の承諾を得てここに転載させていただきました。読んでもらえばわかるように、先方も得るところ多かつた、とのことなので安心しました。この場を借りて、協力願った方々、とくにWilson 博士の訪問を快く受け入れ歓迎していただいた静岡大学の河田雅圭氏、佐賀医科大学の山村則男氏、九州大学の巖佐庸・松田裕之両氏、そして龍谷大学の寺本英氏、さらに京都での交流をより充実するのに協力願った我が同僚、とくに川那部浩哉・安部琢哉・成田哲也・甲山隆司の諸氏に感謝いたします。

東 正彦 （京都大学生態学研究センター）

Research Report for JSPS

David Sloan Wilson
Department of Biological Sciences
Binghamton University
State University of New York
Binghamton, New York 13902-6000
USA

1) Outline of Academic activities

My three-week stay in Japan was based at the Center for Ecological Research at Kyoto, with side trips to Lake Biwa, Shizuoka University, Saga medical school, Kyushu University, and Ryukoku University. At Kyoto I gave a five-lecture series on the theory of group selection and a seminar on single populations as ecologically differentiated units. I gave single seminars at the other universities on topics that included fish ecology, speciation, community-level selection, and the coexistence of specialists and generalists. I met with the faculty and graduate students at each University that are working in the general fields of ecology, evolution and behavior.

2) Impressions and thoughts on the present state of science in Japan and in my field

In general, I was impressed by the quality of science and the energy and dedication of the Japanese scientists interested in ecology/evolution/behavior. Much of the research being conducted is first-rate by international standards and I greatly benefited from meeting and talking directly with the scientists, which is more effective than reading books and journal articles. I will comment more on the positive aspects of my experience in section 3 below. In the remainder of this section I will make some suggestions on how the state of science in Japan can be improved in my field.

Even though many of the Japanese scientists that I met are first rate, they are not adequately supported by the Japanese scientific infrastructure. In fact, it seems that the general subjects of ecology, evolution, and behavior are being neglected compared to other subjects. Physical facilities were below par. The number of faculty and graduate students at most Universities was not large enough to constitute a self-sustaining critical mass. Some of the best scientists that I interacted with occupied University positions that were peripheral to their scientific interests and in some cases did not even allow the scientist to have graduate students.

In my opinion, Japanese policy makers need to recognize that the study of whole organisms in their natural environment is fundamentally important, not only for solving environmental problems, but also for our basic understanding of biology at all levels.

Ecology/evolution/behavior needs to be supported by a infrastructure that includes more University positions, more research facilities, and more funding for research. The scientific excellence to utilize these resources already exists or will quickly develop. The newly formed Center for Ecological Research represents a good start, but the ecology/evolution/behavior groups at other Universities also need additional support.

3) Comments or suggestions to JSPS, especially concerning the fellowship program

I think that JSPS is performing an excellent service by bringing foreign scientists to Japan to interact directly with their Japanese colleagues. Most of my Japanese colleagues have published in the major international journals, but there is no substitute for meeting them personally, exchanging ideas that have not yet been published, and in general forming cordial working relationships. As the result of my visit, I am very likely to initiate one or two collaborative projects with Japanese scientists that almost certainly would not have developed otherwise. I am also more likely to serve as host for a Japanese colleague or to make my lab available for Japanese graduate students and post-doctoral associates. Anything that JSPS can do to maximize contact between Japan and the rest of the international scientific community, and to facilitate collaborative research after contact has been made, will be highly worthwhile.

京都大学生態学研究センター 創立3周年記念講演会のお知らせ

講演会総合テーマ

「生物の多様性を求めて」

開催日：1994年4月9日(土) 14:00～17:30

会場：大津市市民会館(大津市島の関14) 電話：0775-25-1234

JR大津駅より徒歩10分・京阪島の関駅より徒歩5分・京阪浜大津駅より徒歩10分

講演者：生物の多様性をもたらす自然のしくみ 川那部浩哉(京都大学生態学研究センター)

文化の多様性と身近な生き物 嘉田由紀子(琵琶湖博物館開設準備室)

生命誌から見た多様性 中村 桂子(生命誌研究館)

参加人数：200人(参加は自由、無料)

問い合わせ：京都大学生態学研究センター 研究協力掛

〒520-01 大津市下阪本4-1-23

電話：0775-78-0580, FAX：0775-79-8457

京都大学生態学研究センター研究会のお知らせ

ワークショップ「里山の現状」'94 開催のお知らせ

昨年、一昨年に引き続き今年も、人為の大きな影響のもとで形成・利用・維持されてきた「身近な自然」、「里山」を様々な方面から浮き彫りにし、またその将来像を考えるためのワークショップを開催します。前回までのプログラム同様、演題は生態学の領域、あるいは研究者の立場に必ずしも限定せず、行政、市民を含めた情報交換、認識共有のための場としてこのワークショップを活用していきたいと思っております。

共催：里山研究会・京都大学生態学研究センター(共同利用事業、公募研究会)

日程：1994年3月11日(金)～12日(土)(シンポジウム)

3月13日(日) (エクスカージョン)

場所：京都大学 楽友会館(吉田キャンパス南隣)

エクスカージョンには京都府相楽郡木津町を予定

時間(シンポジウム)：9:00～17:00

プログラムの詳細は2月中に発行されるニューズレター「さとやま」をご覧くださいるか、または下記まで。

京都大学生態学研究センター分室 佐久間大輔, 田端英雄

電話：075-753-4240, FAX：075-753-4253

熱帯雨林研究会参加報告

「1993年度地球環境研究総合推進費分野別研究発表会 - 熱帯林生態系の解明をめざして」
森 豊彦（環境科学(株)）

熱帯雨林生態系の解明をめざした研究発表会が、国立環境研究所において1994年1月10～11日まで開催された。日本側は国立環境研究所・森林総合研究所のスタッフを中心に、マレーシア側は主にマレーシア森林研究所との共同研究が1991年から1993年までの3年間、主に西マレーシアのパソー保護林にて行われてきた。今回は3年間の研究の中間発表会であった。さらに、1994年から1996年まで3年間の継続調査が行われる予定である。主要な調査地はマレーシア半島のパソー保護林である。この保護林は日本とイギリスの共同研究が、1970年代にIBPプロジェクトとして調査した地域でもある。今回の調査はその後約20年経た本格的な調査であるといえる。

今回の発表者・要旨集に記載された人数を所属別に示すと、森林総合研究所（22）、国立環境研究所（9）、大阪市立大（3）、名古屋大（2）、京都大（2）、自然環境研究センター（2）、鹿児島経済大（1）、北海道大（1）、東京大（1）、九州大（1）、農業環境技術研究所（1）であり、45名になる。非常に多人数な研究プロジェクトである。

講演数は23題、要旨集には講演しない研究も含め21題であり、講演とは必ずしも一致していない。講演内容は植物（12題）、菌類（1題）、動物（7題）、気象・水文・水質（3題）である。そのほか要旨集には発表のなかった鳥類や昆虫（糞虫）の研究もある。動物の研究をみると、哺乳類（哺乳類全般・リス類・ネズミ類・コウモリ類）、鳥類（群集）、昆虫類（キクイムシ類・糞虫類、シロアリ類）、クモ類である。特に、若手研究者の情熱的な研究姿勢が窺えた。講演を聴きながら約10年前にマレーシアの熱帯雨林にて研究をしていた頃の情景が蘇ってきた。

動物関係の9つの研究テーマを分類すると、群集（6題, 66.7%）、行動（2題, 22.2%）、木材分解（1題, 11.1%）であり、動物相（群集）調査がほとんどである。次に、調査方法を分類すると、トラップ法（6題, 66.7%）、テレメトリー法（2題, 22.2%）、写真自動撮影法（1題, 11.1%）である。なお、クモ類の調査ではトラップ法と任意採集法を、リスとコウモリ調査でもトラップ法を用いている。写真自動撮影法も餌とカメラを置く方法であり、一種のトラップによる動物確認法である。従って、トラップ方法に重点を置いた研究が全体の約89%も占めており、もう少し独創性のある調査方法を期待したい。また、今回は内容的に見て予備調査的な位置づけであると考えられる。これらの研究には昆虫類を対象としたものが少なかった。熱帯で最も多様性に富む昆虫類の研究が少ないのは残念である。生態系の解明には昆虫類等の分類研究が不可欠であり、今後、分類研究者の参加も期待したい。

ところで、今まさに、東南アジアは日本の熱帯雨林研究ブームである。特に長期研究では、マレーシア（半島）での国立環境研究所・森林総合研究所合同チーム、マレーシア・サラワク州（ボルネオ）での林冠研究チーム、インドネシア・カリマンタン（ボルネオ）でのJICA専門家チーム、タイでの湿地林研究チームなどがある。これらの研究発表会としての機能を果たす日本熱帯生態学会第4回大会が、本年6月に国立環境研究所にて開催される予定である。

熱帯学栄えて熱帯雨林が減ることのないように、役に立つ応用的な研究テーマの必要性が感じられた。つまり、海外学術調査は調査地が原生林にばかり偏り、二次林や植林での研究が少ない。それは日本で里山の研究が少ないのと同じ傾向にある。特に、マレーシア・サバ州（ボルネオ）のように木材生産によって経済が成り立っている国では、原生林の調査よりも二次林・植林の調査が必要不可欠である。また、調査国に技術移転を積極的に行い、国際交流の輪も広げたいものである。

information

【九州大学理学部生物学教室生態学講座担当教授公募】

1. 職 名 生態学講座担当教授 1 名
2. 専攻分野 生態学およびその関連分野の研究と教育
(国籍は問いません)
3. 提出書類
(1) 履歴書 1 通
(2) 研究業績目録(主要論文 7 編以内に 印をつけ、その別刷各 1 部を添えて下さい)
(3) 現在までの研究の内容と将来の展望、九州大学に着任した場合の教育、研究に対する抱負
(総説などがありましたら添えて下さい)
(4) 推薦書(自薦の場合には必要ありません)
4. 締め切り期日 平成 6 年 4 月 3 0 日
5. 送付先 〒812 福岡市東区箱崎 6 - 1 0 - 1
九州大学理学部生物学教室
巖佐 庸
(人事応募書類在中と朱記し、書留書類にて送付のこと)

電話：092-641-1101 内線 4439, 4438

FAX：092-632-2741

電子メール：iwasa@bio-math.bio.sci.kyushu-u.ac.jp

編集後記

- ・センターニュースが今号からA4版に変わりました。レイアウトなどについてもご意見をお寄せ下さい。
- ・昨年より雪の多い冬ですが、それでも気温は平年並みをやや上まっているようです。この先どのような春が来るのでしょうか。
- ・新年度を目前に控え、いよいよ手狭になったセンターでは共同利用のためのスペース確保に気を揉んでおります。

(M.Y.)

京都大学

生態学研究センター・ニュース の問い合わせ先

京都大学生態学研究センター・ニュース編集係